

はじめに

著者	三井 はるみ
雑誌名	首都圏言語研究の視野：首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書
発行年	2014-02-25
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告；13-02
URL	http://doi.org/10.15084/00002718

はじめに

1. 本報告書の目的

本報告書は、国立国語研究所萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」の主要な研究成果を、論文・講演録の形でまとめて公表するものである。各論文・講演録は、本プロジェクトの共同研究発表会、各種学会での口頭発表などの内容に基づく。口頭発表から完成論文への発展の途上にある、現時点での途中経過をまとめた論考を中心とするが、研究の進展が早く、すでに論文として学会誌等に掲載されたものの再録も含む。プロジェクトの中で議論された研究課題を、その広がりとともに記録しておくという意味で、このような構成をとることにした。

2. プロジェクトの目的と本報告書の内容

本プロジェクトの目的は、首都圏の言語の総合的研究の基盤を築き、今後取り組むべき課題を見出すことであった。具体的には、各共同研究者がそれぞれ興味を持っている課題に取り組み、その報告を持ち寄って研究交流を深める中で、共通する現代の「首都圏の言語」の特質が見えてくるのではないかと考えた。

首都圏、とりわけその中核地域である東京のことばは、「現代日本語」と密接に結びついた中央語としての位置づけをもつ。そのためこの地域の言語は、方言研究のみならず、近代語研究、都市言語研究、言語動態研究といった、多様なアプローチによる研究が行われてきた。そこに本研究が「萌芽・発掘」として何を加えようとしたかと言えば、主として地域言語研究の立場から、現在の首都圏という地域のありようの中で、あらためて言語の現状をつぶさに具体的にとらえ、今後この地域の言語に切り込んでいくために有効な観点を洗い出すところにあつたと言えよう。

本報告書には、21編の論文、講演録、紹介文を掲載した。そのテーマは多岐にわたる。地域言語研究のほか、近代語研究、国語教育の分野からも寄稿いただいた。本書の内容は、完全に網羅的なものとは言えないけれど、その全体において、特質や観点を導き出すベースとなる「首都圏言語研究の視野」を提示したものとなった。

3. 本報告書の概要

3. 1 全体の構成

本報告書は、内容のまとまりごとに全体を3部に分けて構成した。総論にあたる「第1部 対象と方法」、各論にあたる「第2部 個別研究」、研究の基盤となる「第3部 研究ツール・アーカイブ・データベース」である。第1部には4編の論文・講演録を掲載した。第2部はさらに「地域研究」「全国の中の首都圏」「アクセント」「音声」「方言利用・言語景観」「教育」の6つに分類し、計14編の論文、講演録を掲載した。第3部には論文2編と紹介文1編を掲載した。

なお、本報告書の別冊として、吉田雅子・三樹陽介編『首都圏の言語に関する研究文献目録(稿)』を作成している。併せて利用していただければ幸いである。

3. 2 「第1部 対象と方法」の概要

「第1部 対象と方法」は、総論にあたる。プロジェクトタイトルの「首都圏」は、いまだ研究者間で言語圏としてどの地域を指すか明確な一致を見ているとは言いがたい。

本研究で作成した「首都圏の言語に関する研究文献目録」(Web版 http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/3_summary.html, 冊子版 吉田雅子・三樹陽介編『首都圏の言語に関する研究文献目録(稿)』)の分析によると、東京を中心とする都市圏を一つの言語圏をなすものとして注目した論文は、1970年から現れた(第3部三樹論文)。タイトルに「首都圏」という地域名が用いられるのは1983年(河崎裕子・井上史雄「首都圏の〈新方言〉」井上史雄編『〈新方言〉と〈言葉の乱れ〉に関する社会言語学的研究』科研費報告書)、地域方言としての「首都圏方言」という名称をタイトルに用いた論文は2003年(田中ゆかり「首都圏方言における形容詞活用形のアクセントの複雑さが意味するもの — 「気づき」「変わりやすさ」の観点から —」『語文』106)に現れる。

1960年代の高度経済成長期に進んだ東京への人口集中に伴う通勤圏の拡大と市街地の拡張、移住に伴い母方言とは異なる共通語で日常生活を送ることになったノンネイティブの増大と二世化・三世化、それと平行して進んだ東京および周辺地域の在来方言の共通語化...、こういった社会変動の中で生まれたのが、共通語に近い比較的均質な言語的実態を持つと意識される「首都圏」という言語圏であったと考えられる。この地域が一つの言語圏として注目され、名付けられ、研究対象として措定される過程は、この地域の言語状況の変動と言語的実態の変質を追いかけるように進んだものと捉えることができる。

このような変動を経て生まれた「首都圏」地域の言語は、しかし、実際には均質というわけではない。それどころか今日では、個人差場面差はむしろ非常に大きいと捉えられている。また少なくともアクセントについては、東京都23区東部・埼玉県南東部・千葉県北部という首都圏東部一帯に、共通語・標準語基盤方言とは異なる体系を観察することができ、その記述は現在も課題の一つである。このようなことから本研究では、「首都圏」のことばを何らかの均質性が想定可能な一つの方言と積極的に捉えない。その意味で研究課題名として「首都圏方言」という術語は用いず、仮にではあるが、「首都圏の言語」という名称を採った(もちろん、従来一つの「方言」とされていることばも、内部に多様性を有しているのが普通である。むしろ自然言語である限り、完全に均質ということは考えにくい)。ただしこの点は、本報告書の執筆者の間でも立場に違いがある。

第1部の各論文では、これら、研究の基礎となる対象と方法について、最近の調査から、あるいは、これまでの研究の蓄積に基づいて、それぞれの立場から論じている。

三井論文は、地域差の存在が意識されにくい現在の首都圏若年層の言語にも、明瞭な地域差や分布域の変化が認められる例があることを、本プロジェクトの共同アンケート調査の結果から報告した。

久野論文は、この地域の言語を「首都圏方言」ととらえる。他方言、および、他の都市言語と

の比較を念頭に、共通語との違いを含めた検討を行い、「東京方言の共通語化したもの」との性格付けを提案する。付録の「新・東京都言語地図」（1989-1991 調査）は、東京周辺を含んだ地域の実態を示す資料の一部である。

鎌水論文は、首都圏の言語をめぐる関連術語の整理、という方向から研究の観点の概観を行う。各概念の違いを明確にすると同時に、観点の重なりや連続性にも留意し、流動する言語や言語意識との関わりを論じている。

飛田論文（講演録）は、公開研究発表会における講演の記録である。飛田氏の御専門は近代東京語成立史の研究である。この時代の「東京語」もまた、地域の流動性、話し手の多様性、スタイルの問題、「標準語」との関係、という点で、現代の首都圏の言語と同様の捉え難さを持っている。飛田氏は、1990年代に東京の鉄道沿いの年代別言語調査も実施されており（詳細は第2部竹田論文）、近代語研究と地域言語研究の橋渡しというべき内容となっている。

3.3 「第2部 個別研究」の概要

首都圏の言語は多様であるだけに、実像をとらえるためには、一見ばらばらに見えるようでも、ターゲットを絞った個別の研究をそれぞれ積み重ねていくことは重要である。第2部には、首都圏の言語を扱った個別研究を15編、6つの分野に分類して掲載した。

〔地域研究〕は、首都圏内の地理的分布を扱った研究である。

鎌水・三井論文は、第1部三井論文と同じ、首都圏大学生への共同アンケート調査の結果から、語形の使用だけでなく、改まり・通用範囲・使用頻度といった語形に対する評価意識にも地域差が見られることを報告している。意識の地域差から、語形の普及・衰退のプロセスや地域の言語的志向性が推定される可能性にも触れている。

竹田論文は、第1部飛田論文で触れられていた、鉄道路線沿い世代別言語調査の概要と、結果の一部を報告するものである。未整理未公表であった資料が、今回竹田氏によって整理・公表された。結果はグロットグラムで提示されており、23区中央部（山手線・総武線）と多摩西部（青梅線）について、年代差、地域差を観察することができる。「坂」のアクセントの1型が青梅線沿線に広く現れるなど、これまでの調査とは異なる結果も見られ、今後の精査が期待される。

亀田論文は、埼玉県西部における伝統的方言の分布調査報告である。「今が最後の時期」と位置付けた継続的な臨地調査により、これまで曖昧であった「秩父方言」の東側境界の状況が明確に示された。共通語化著しい首都圏の伝統的方言は、他方言に劣らず、跡形もなくなるような消滅の危機に瀕している。その中で地道な取り組みの成果である。

〔全国の中の首都圏〕は、一般的には全国的な変化を先導すると捉えられている首都圏のことだが、実際には、全国方言との間でどのようなインターアクションを持ちながら存在、変容しているか、という観点からの研究である。

鎌水論文は、全国35大学約2700名を対象に行った、全国若者語調査の結果に基づく報告。全国規模の地域差の存在、「東京←→関西」のような大都市中心部間の相互伝播、各都市中心部から周辺部への伝播、属性差の中に隠れた地域差の存在等、伝統方言の伝播とは異なる側面を持ったタイプの言語伝播モデルを提唱している。

三井論文は、関西方言出自の「～てほしい」という形式が共通語として普及定着する過程に着目し、この形式が関西から東京に受け入れられるにあたっては、「～てもらおう」という受納表現の補助動詞用法の変化が下地にある、という仮説を述べる。「～てもらおう」の変化自体、関西方言で先行していたものであり、根本には、都市部独特の発想法の存在といったものが考えられるとする。

[アクセント] は、共通語形・標準語形の選定、ということとも関わって、東京語、東京方言のバリエーション研究として取り上げられることの多いテーマである。

佐藤論文（講演録）は、御自身の取り組んで来られた東京アクセント研究の成果を中心に、「変化」「地域差」「世代差」「方言アクセントの共通語化」「関東方言アクセントとの関係」の諸観点からこれまでの研究をレビューし、最後に、今後の課題を提言されている。この地域のアクセント研究を行う上でのガイドとなるものである。質疑応答では、具体的な例をめぐっての議論も行われており参考になる。

坂本論文は、首都圏の最も外側に位置する小田原市方言のアクセント体系を記述する。前の佐藤論文（講演録）で触れられていた「関東方言のアクセントと東京アクセントとの関係」は、このような基礎的な記述があって初めて成り立つものであろう。

亀田論文は、共通語基盤方言のアクセントと異なり、ゆれが多く、従来曖昧で体系がとらえがたいとされてきている埼玉特殊アクセントを取り上げる。久喜市高年層の複数の話者の発話実態に基づき、音韻論的型と音声学的音調規則という二つの力の張り合い関係の異なりとしての解釈を試みる。実際の音調のゆれのほか、アクセント体系の移行をも説明しうる枠組みであり、注目される。

林・田中論文は、アクセントに止まらず、各研究者が保有する言語調査データを、共有して活用するための仕組みを提案している（『語文』145 から再録）。Web 言語地図システムそのものの整備のほか、データの管理というより微妙で難しい問題にも一定の提案をもって踏み込んでおり、今後のデータ共有の取り組みの核になるものと思われる。なお、調査データ共有については、第3部鎌水論文でも RMS システムの方法について述べられている。

[音声]には、首都圏若年層に見られる新しい現象を報告した久野論文を収める。母音間の「ん」の発音が不安定であり、非鼻音の長音と認識している人が少なくないというこの事実は、久野氏によって初めて報告された。このように気づかれないうちにかなり広まっている新しい非標準的な事象は把握することが難しいが、発生後間もないと思われるので、その発生・伝播の過程を捉えることも可能かもしれない。事実のさらなる把握と、背景について興味を持たれる。

[方言の利用・言語景観] は、言語形式のメッセージとしての利用に見られるような、言語の拡張利用に関する研究である。

亀田論文は、首都圏における方言の地域資源として活用に関する、自治体（広報部署、観光部署、教育委員会）と商工会への悉皆通信調査の報告である。方言への社会的評価への高まりとともに、キャッチフレーズやネーミングへの方言の使用、方言集の編纂等、方言を地域の資源として活用する例が全国で増えてきている。首都圏は、従来、方言への社会的注目が高くないと考えられてきたが、今回の悉皆調査によって現状を把握することができた。首都圏の中でも、神奈川

県が他の地域と異なる採用態度を見せるなど、首都圏内の地域差もうかがわれた。

三井論文は、さらに、東京都多摩地域における「のめっこい」という語にターゲットをしばって、この地域における在来方言の地域資源としての利用の実態と背景を考察したものである。「親しみがある」という、この語の意味の一部だけが特に利用される理由、若年層における「ニセ方言」としての取り入れの予兆など、語誌としての記述を試みた。

田中・早川・富田・林論文（『言語研究』142より再録）は、東京秋葉原の多言語表示に着目し、他地域と異なる多言語化の状況、および、店舗分野の違いによる使用言語の違いを明らかにした。その上でこれを、街を構成する要素と関係するものと位置づけ、地域類型論への広がりを示唆している。本報告書の他の論文が直接扱うことなかった、「全国・世界から人の集まる都市の言語」としての「首都圏の言語」の側面にアプローチした論考として、ここに収録させていただいた。

[教育]では、小学校の国語教育の現場から、小林氏に寄稿（講演録）していただいた。小林氏の在職する福島県の小学校の教育現場では、方言と共通語の問題は、日々の生活と学習の中で常に意識されるものとして取り上げられている。国語教育としての普遍的な課題である「ことばの力を育てる」ということと、東京では意識されることのない「地域のことば」との絡み合いを、豊富なご経験に基づいて具体的に述べている。なお、冒頭にあるように、小林氏は、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故によって現在も避難生活をされており、そのような中での、ゲスト授業、ご寄稿であったことを申し添える。

3. 4 「第3部 研究ツール・アーカイブ・データベース」の概要

本プロジェクトでは、研究会活動と調査研究活動を行うほか、新たな研究につなげるための基礎となる「研究資産の再構築」に取り組んだ。また、特に首都圏若年層の言語実態を把握する調査を行う上で、有効な調査方法を検討し、システムの開発を行った。第3部は、これら、研究の基盤となる活動に関連する論考と紹介である。

鎌水論文は、携帯電話を用いた言語調査システム、Real-time Mobile Survey (RMS) システムの概要と、その開発にいたる調査方法論に関する解説論文である（『国立国語研究所論集』6から再録）。RMSは、若年層を対象とした言語調査において、回答者に負担をかけず、大量の精度の高い回答を得、速やかに集計・処理・地図化を行い、データを蓄積利用する、といった、従来ニーズがありながら実現が難しかった点を幅広く検討し、Web調査等との比較検討を経て、鎌水氏が開発したシステムである。特に、首都圏若年層における言語の地域差の把握、といった、試行錯誤的な調査の繰り返しが予想され、かつ、多人数高密度の分布を得ることが必要な調査において、有効性が見出されている。第1部三井論文、第2部鎌水・三井論文で扱った、「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」は、このシステムを利用して調査、作図を行ったものである。

三井論文（紹介文）は、本プロジェクトの成果公開サイト（<http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>）の紹介である。メインコンテンツである、「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」地図と解説、東京のことば研究者インタビュー、首都圏の言語に関する研究文献目録、東京語アクセント資料の4種の資料・データベースについて、内容と作成の経緯を紹介した。

三樹論文は、Web版、冊子版で公開した「首都圏の言語に関する研究文献目録」に採録した論文を対象に研究動向の分析を行ったものである。発表年代、対象地域、言語分野から文献数を分析し、1970年代以降、単一都県を対象とした論文数は横ばいであるのに対し、複数都県を対象とした論文数が増加していることなどを指摘している。

4. 今後に向けて

本報告書におさめた21編の論文は、本プロジェクトの共同研究発表会、各種学会の口頭発表などで発表した内容に基づいているが、学術誌や著書などでは未発表のものがほとんどである。それらは、今後より完成されたものとしてまとめられていくはずである。このような報告書を編むことができたのは、「首都圏の言語」という、多様、多面的で流動性に富む対象の「現在」の解明を目指して共同で研究に臨むことで、各研究者がそれぞれの目から見える「首都圏の言語」を描き出そうとし、それらが交わり始めた結果だと考えられる。

今後の研究の発展のために、この報告書が役立てられることを願うものである。

2014年1月28日

三井 はるみ